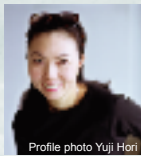


宮内彩の New Zealand Style no.11

New Zealand Fashion Weeks特集



▲**Trelise Cooper**
華やかなステージを繰り広げたトレリス・クーパーは、20年代調のロマンティックな雰囲気ドレスを披露。



宮内彩 東京生まれ。西町インターナショナルスクールを経て、スイス・ル・ロゼ高校、米タフツ大学卒業。帰国後、パリ・ミラノ等世界のコレクション取材。雑誌・新聞・テレビ・ラジオ等でファッション・コラムニストとして活動。オークランド在住の中村嗣氏と結婚のため、2000年より生活の拠点をNZに移動。01年、長男・章人君、02年、次男・天人君誕生。子育ての合間を見て、旅・食・住等ライフスタイル全般のコラムニストとして英語及び日本語で執筆活動が続けている。著書は近代文藝社「おしゃれのエッセンス」「おしゃれのエッセンス旅コレクション」(母・大内順子と共著)等。NZでの生活のエッセイが載っているホームページはwww.ouchi-junko.com



▲**Kate Sylvester**
1930年代から40年代にわたり、イギリスで話題だったミットフォード姉妹にインスピレーションを受けたフェミニンな作品をみせたケイト。



▲**Zambesi**
25周年を記念するコレクションでは、過去のアーカイブから復元された作品も数多く見られた。



▲**Karen Walker**
さすがワールドクラスのカレンだけに、コレクションも完成度が高い。アドベンチャーの要素が盛り込まれたショーだ。

今年はNZファッションウィークにとって、大きな変化の年と言えるだろう。ショー会場もこれまでのオークランド・タウンホールから、アメリカズカップの元アリングベースになり、スポンサーもロレアルからニュージーランド航空に代わっている。デザイナーの顔ぶれ、作品のレベル、オーガナイズ、会場の雰囲気、共に毎年レベルアップしているが、今年は更に著しい成長が見られた。特に、日本からバイヤーやメディアが数多く参加していることは、「NZファッションウィークも世界レベルに達した」ことを物語っている。

今年で4回目を迎えるNZファッションウィーク。最初は単なるお祭り騒ぎのようだったこのイベントも、今では世界中どこに出しても恥ずかしくないレベルに達している。アメリカズカップのヨットベースだけに、天井の高い建物内には4つのショー会場が設けられ、規模によって、二つの会場をつなげて使うこともできる。デレゲート(レジスターされたメディア、バイヤーなどもファッションプロ)たちの為のヘルプデスク、フリーコーヒーなど、ありがたいサービスも充

実している。コーヒーのラウンジには飛行機の座席が使われたり、Insidious Fixのショーでは飛行機の機内サービスの演出があるなど、『AirNZ』ファッションウィークであることが至るところで感じられた。

ファッションウィークが定着してきたと同時に、業界人達の「アティテュード」も少し変わって来たような気がする。とても「ファミリー的」でほのぼのとしているNZのファッションウィークが、徐々に「ファッション的」な「お高い」アティテュードを持つようになって来たことは、少し残念だが、この世界では避けて通れないことだろう。

まず、今回感じたのは「最前列ステータスの定着」だ。パリコレやミラノコレクションでは、毎回最前列に並ぶのは同じ顔ぶれだ。VWD、ヴォーグ、フィガロ、ヘラルドトリビューンなど、世界の最も影響の強い業界紙、ファッション雑誌、一般紙などがずらりと並ぶ。ファッションショーの会場において最前列というステータスは、何ものにも勝るということを覚えていてほしい。席によって、位がはっきりと差別されてい



▲**World**
いつもながらスペクタクルショーを見せてくれるワールド。ユーモアのセンスと、カラフルな色彩は観客を楽しませてくれた。



▲**NomD**
「This is not a love song」と題されたノムDのコレクション。今回のショーでは黄色とブルーを刺し色に使い、明るいイメージを演出。



▲**Helen Cherry**
今回初参加のヘレン・チェリーはフェミニンなスタイル。ワークショップ、ワークショップデニムと共にショーを発表した。

▲**Sakaguchi**
NZファッションウィークに参加する唯一の日本人、サカグチは黒を基調とした、アシンメトリーなデザインが特徴。

るのだ。

NZではそこまでの顔ぶれが揃う事はないが、海外への輸出を重視するNZでは、毎回インターナショナルなメディアやバイヤー達がVIPとして最前列に並ぶ。しかし、中にはローカルなメディアでも最前列ステータスを持つ、影響力の強い媒体も少なくない。これは、あるショーで私が耳にした会話だ。2列目のチケットを手にした某全国紙のファッションエディターは「今、直接デザイナーのDに、私はこの席では満足だから、帰りたいって言ったのよ」と同列に座らされていた某ファッション雑誌の編集長に言うと、「私も同感だわ！まったくなんて失礼なの！」と彼女も不服そうに答えた。これを聞いていた私は「ああ、NZもこうなってしまったか」と少し寂しい気がした。

そんなことはさておき、今回のコレクションで際立っていたショーをご紹介しよう。まずはトレリス・クーパー。セカンドラインの「クーパー」と「トレリス・クーパー」の2部構成のショーは作品数も多く、トレリスの世界を色濃く表現するも

のだった。ダンスや音楽を交えた20年代調のファンタジー溢れるショーは、観客を魅了した。また、25周年を記念するザンベシは、過去のコレクションを振り返る、力強い作品を見せた。NZファッションの先駆者と言えるこのブランドが、若いクリエイター達に与えた影響の強さを改めて感じさせるものだった。NZのファッション界をリードし続けるザンベシの根強い人気とクリエイティビティはまだまだ健在だ。アオテアセンターのステージ上で行われたノムDのコレクションも、いつもながらカッコイイものだった。着る人の好みで何通りにでも着こなせる上下に袖のついたニットや、活動的なフード付きスタイルの数々は、NZらしいカジュアルさと自由な楽しさを感じさせてくれた。

年に一度の大イベントとして、回を重ねる毎に存在感を増しているNZファッションウィーク。NZのデザイナーブランドが欧米のブランドと肩を並べ、メジャーブランドの仲間入りをする日もそう遠くはないだろう。



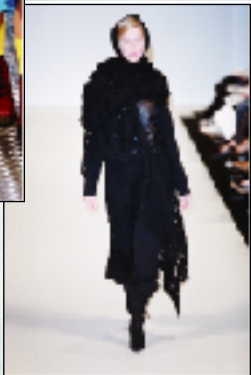
▲**Doris De Pont**
今回、ショーではなく、DVD形式の発表を行ったドリス。テーマは「ダンス」で、動きのある映像で服を見せた。



▲**Insidious Fix**
ニットが可愛いインシディアスフィックス。飛行機の機内サービスを演出したショーでは、各座席にシートベルトまで用意されていた。



▲**Sidewalk**
昨年はNew GenerationとしてNZFWデビューしたサイドウォークも、今年は商品群を拡大し、大きな成長を見た。



▲**Sabatini White**
ニットに限らず、トータルなファッションブランドに変貌しているサバティニ。



▲**Overstayer**
ヒップホップのKing Kapsiのブランド、オーバーステイヤーはストリート感覚たっぷり。

